

楽漢的「燕雀鴻鵠」考

「引用型」故事成語の受容に着目して

狭山ヶ丘高等学校 樋口 敦士

一 はじめに

一口に故事成語と言っても、古人の言葉を忠実にそのまま切り取った「引用型成語」と、後人により故事の概要に名称が付けられたとおぼしき「摘要型成語」に分けられる。前者には「先づ隗より始めよ」、「奇貨居くべし」、「苛政は虎よりも猛し」などがあり、後者には「愚公山を移す」、「人間万事塞翁が馬」、「臥薪嘗胆」などがある。特に、「引用型成語」は、ある場面における歴史上の一人物の発言の一部を切り取ったものであり、前後関係が不明瞭であれば、故事の全貌がつかみにくいこともあるだろう。ただし、先人たちの生の言葉には日常語に埋没されない文語体の余韻が漂う。つまり、可塑性の乏しい文体の硬質性がある種の言語効果をもたらすものとなる。そもそも「引用型成語」はその受容においてどのような変遷を辿ってきたのだろうか。本稿は故事成語「燕雀安知鴻鵠之志哉（燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや）」を取りあげて言語的側面から考察するものである。

二 漢籍における「燕雀鴻鵠」用例

当該成語は青雲の志を有する人物の言葉であり、春秋に富む高校生に向けて紹介するにふさわしいものがある。ここには「ツバメ」や「スズメ」といった「小鳥の類（小人物）」には「オトリ（大人物）」の持つ大志を理解できないとする寓言を引きながら、周囲から困難を指摘されても自身が大望を持ち続けて結果につなげた人物が登場する。ただ、必ずしも生徒になじみのある故事成語とは言えない。典拠は『史記』「陳涉世家」や『漢書』「陳勝項籍伝」の中に見える陳勝が仲間にも語った発言の一節である。

陳勝者、陽城人也。字涉。吳広者、陽夏人也。字叔。陳涉少時、嘗與人傭耕。輟耕之壟上、悵恨、久之、之曰、「苟富貴、無相忘。」傭者笑而応曰、「若為傭耕、何富貴也。」陳涉太息曰、「嗟乎、燕雀安知鴻鵠之志哉。」（『史記』「陳涉世家」）
秦末期、史上初の農民蜂起「陳勝・吳広の乱」により一時的には王位に就くことになる陳勝若き日のエピソードが冒頭に紹介される。雇

われ農民に過ぎない陳勝が雇い主（あるいは小作仲間とも）に将来自身が富貴になった際の処遇を話題にしたところ、全く相手にされなかったことに対して当該成語が発せられる。陳勝は「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」と嘆じ、血統という既成概念から脱せない相手の狭量を批判する。言葉通り陳勝は張楚王の地位に就くが、まもなく秦の攻勢により滅ぼされる。

『韓詩外伝』卷六によれば、「鴻鵠」は一挙にして千里を翔る「オトリ」を指し、これは『孟子』、『列子』、『説苑』など諸書にも見られる。以下に漢籍における当該成語の用例を確認する。まず、史書類には次のようなものがある。

- (1) 卓曰、「鴻鵠固有遠志、但燕雀自不知耳。」（『三国志』魏書・卷六「董卓伝」）
- (2) 潜曰、「陳勝有言、燕雀安知鴻鵠之志。」（『晋書』卷四十二「王潜」）
- (3) 操曰、「燕雀安知鴻鵠志哉。汝既拿住我、便當解去請賞。何必多問。」（『三国志演義』第四回）

(1) 後漢末期、権力を握った董卓がかつての同

僚皇甫嵩に尋ねた場面である。董卓は自身を「鴻鵠」、聞き手（皇甫嵩）を「燕雀」にたとえて、自身の大志をおまえは知らなかったのだからと揶揄している。(2)晋の武将王濬は大志を抱き、自邸の門前の道を広げて大きな武具への対応を公言した際に、衆人からの嘲笑を受けたことに對し、当該成語を用いて自身の志が周囲に理解されないと訴えている。(3)專權を振るう董卓に暗殺を仕掛けた曹操が事破れて逃亡し、梟令たる陳宮に向けて発した言葉であり、曹操も自身を「鴻鵠」になぞらえている。いずれの用例にも当該成語は登場人物の会話文中に見られる。こうした事例からは当該成語が話し言葉に取り込まれて盛んに用いられた形跡が窺える。

明代の丘瓊山『故事成語考』には「小人不知君子之心」曰「燕雀豈知鴻鵠志」と注される。漢詩文には「不聞燕雀知鴻鵠」(曾肇「二賢堂」)、「燕雀不知鴻鵠志」(華岳「悶題」)、「燕雀豈知鴻鵠」(辛棄疾「破陣子」)、「鴻鵠安与燕雀同」(耶律楚材「用前韻感事」)、「燕雀焉知鴻鵠」(張野「念奴嬌」)、「燕雀未知鴻鵠志」(郭諫臣「贈孔曲山秀才」)のほか、古文辞派王世貞「円機活法韻学」「燕雀安知鴻鵠志」にも若干の異同が見られ、定型語ではなかったことがわかる。

三 和書における「燕雀鴻鵠」用例

当該成語は、平安時代の『世俗諺文』、鎌倉

時代の『玉函秘抄』、「明文抄」に「燕雀安知鴻鵠之志哉」、戦国時代の『句双紙』に「燕雀何知鴻鵠志」などが見える。また、漢詩文にも平安初期の賀陽豊年「寄言燕雀徒寧知鴻鵠路」(『凌雲集』)、戦国時代の相国寺西笑承兌「鴻鵠志非燕雀之知」(『南陽稿』)などの作品がある。さらに下つて江戸時代になると多くの書籍に散見される。

- ① 宗親『祇園物語』(一六四四)
- 陳涉が日用にやとはれし時に、富貴をわすれじと申けるを、わきの者わらひければ、「燕雀なんぞ鴻鵠の心さしをしらん」と申す。後にもろこしに隠れなき人になれり。
- ② 浅井了意『新語園』(一六八二)
- 史記ニ陳勝カ云フ「燕雀安知鴻鵠之志哉」是雀ハ短尾ノ小鳥ナリ。
- ③ 大高坂芝山『南学伝』(一六九二)
- 以此詆、彼所謂斥鴳笑「大鵬、燕雀不知鴻鵠之志」者也。
- ④ 宮川道達『訓蒙故事要言』(一六九九)
- 陳涉コレヲ聞テ大ニ嘆息シテ曰「燕雀ツレノ者ハ鴻鵠ノ如キ大鳥ノ志ヲ知ンヤト云。
- ⑤ 宇佐美瀧水『護園録稿』(一七三二)
- 燕雀一枝安、鴻鵠思大沢。(越君瑞)
- ⑥ 江島其積「鬼一法眼虎の巻」(一七三三)
- 「イヤ宏才なる奴がある。それほどの事をおのれに教へられふか。片腹いたし、燕雀なんぞ鴻鵠の心をしらん。いはれぬ事をぬかさふか」

- ⑦ 安田蛙文『雷神不動北山桜』(一七四二)
- 「燕雀何んぞこうこくの心をしらんのとへを打くずしての御挨拶、承はる事でござる」
- ⑧ 本居宣長「谷川土清宛書簡」(一七六五)
- 若将言「燕雀安知鴻鵠之志哉」、是亦抗顔誇世者言已。
- ⑨ 並木五瓶「樸門五三桐」(一八〇〇)
- 「燕雀なんぞ大鵬の心をしらんや、汝等が鋒先を以て、此宋蘇卿を突止めんとは」
- ⑩ 滝亭鯉丈「花曆八笑人」(一八二〇)
- 「ナン又のたり出る。燕雀なんぞ大鵬の心をしらん。此一何回等のことを言出ルや。つぎの段に分説をまつて知れ」
- ⑪ 滝沢馬琴『南総里見八犬伝』(一八二二)
- 「噫咻や。あながまや。燕雀那ぞ大鵬の志を知るよしあらん。管領はいと貴き歟」

それぞれ①・②・④は陳勝の故事、③は野中兼山の評、⑤は漢詩の一節、以下はそれぞれ⑥鬼一判官、⑦条寺弾正、⑧不遜者、⑨此村大江之助(宋蘇卿)、⑩辛八先生、⑪犬山道節などの言に引かれる。特筆すべきは、③土佐の執政野中兼山の死後、息子たちが僻地に配流された史実に照らした評である。つまり、「兼山(鴻鵠)」の大志を理解せずその死後に家族の者を排斥した周囲の者を「燕雀」に見立てた。また、⑤文人服部南郭を「鴻鵠」と讃えたものもある。上記の用例からは「いづくんぞ」ばかりではなく「なんぞ」が用いられたり、「鴻鵠」に代わり「大

「鵬」が現れたりするものもある（「鵬」は「オオトリ」の意で『莊子』内篇「逍遙遊」に見える）。

わが国においても会話文中に多く引かれ、話し言葉として認知されていた。明治時代の辞書類には、「燕雀焉ぞ大鵬の志を知らんや」（『日本名望家逸事』）、「燕雀安ぞ鴻鵠の志を知らんや」（『俚諺辞典』）、「燕雀イツクンゾ鴻鵠ノ志ヲ知ラン」（『諺語大辞典』）、「燕雀安知鴻鵠志」（『故事熟語辞典』）、「燕雀安ソゾ鴻鵠ノ志ヲ知ランヤ」（『故事成語大辞典』）と記載され、基本的に反語形「安んぞく知らん（や）」に寄せられた状況が窺える。また、文学作品の用例には以下のようなものがある。

- ⑫ 島村抱月『新美辞学』（一九〇二）
人事上の諷刺勸誨の意を無生物其他劣等なる物の動作に寓せしむるの比喩といふべし。例へば「鷲鳩を以て大鵬を咲わふ」「燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らんや」などいへるは何れも小人が君子の心を得知らざる由を鳥の上に寓言せるの類なり。
- ⑬ 夏目漱石『吾輩は猫である』（一九〇六）
「燕雀焉んぞ大鵬の志を知らんやですな」と寒月君が恐れ入ると、独仙君は左様さと云はぬ許りの顔付で話を進める。
- ⑭ 高浜虚子『子規居士と余』（一九二二）
鴻鵠の志は燕雀の知る所にあらず。大鵬南を凶つて徒らに鷓鴣せうろうに笑はれんのみ。
- ⑮ 新渡戸稲造『自警録』（一九一六）

古人の言に「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らん」として小人が英雄の心事を解し得ぬに譬へたが

- ⑯ 岡本綺堂『正雪の二代目』（一九二七）

「燕雀焉んぞ大鵬のこゝろざしを知らんとはこの事で、貴様たちのやうな小人ばらに英雄豪傑のこゝろざしが判ると思ふか」

こうした文学作品においても「なんぞ」や「大鵬」が使用されている。また、「鴻鵠（大鵬）」は一人称に限らず、聞き手「独仙」（⑬）や師「子規」（⑭）のように二人称、三人称的な用例もある。また、会話文中に多く引かれるため、人口に膾炙されていた状況が窺い知れる。

わが国における当該成語の受容状況を俯瞰すると、平安時代の『世俗諺文』には典拠通りの「燕雀安知鴻鵠之志哉」が記載され、その後は諸書に異同が見られるものの、基本的に「いづくんぞ（なんぞ）く知らん（や）」のフレームは崩れていない。さらに、明治時代の辞書類には原典に即した訓読調の書き下し文体で明記され、小説類でも上記のような反語形が多く用いられた。明治以降には典拠を忠実に再現しようとする動きが活発になる。言文一致体、候文体、普通文体など各種文体が混在した明治三十年代には文体意識が闡明になり、漢文訓読基調の普通文は新聞や官報などの公文書において書記言語としての機能を果たした。つまり、「引用型成語」の口調が忠実に求められたことになる。援用者は「いづくんぞ（なんぞ）」を口にするたびに、

背後に陳勝の影を意識し、その格調を備えるべく言語の硬質性に期待したものと思われる。

四 「引用型成語」におけるエクリチュール

「引用型成語」は、歴史上の人物の発言を切り取っており、単語というよりは一つの文に相当する。結果的に「摘要型成語」に比べても長いものが多い。特に「燕雀安知鴻鵠之志哉」は、訓読で読み下した場合（拗音・促音を一音に含まず）にカウントすると24音節にもなる。以下に、他の「引用型成語」をいくつか並べたい。

- ・ 昏亡びて齒寒し（12音節）
 - ・ 虎穴に入らずんば虎子を得ず（14音節）
 - ・ 過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし（16音節）
 - ・ 少年老い易く学成り難し（16音節）
 - ・ 死せる諸葛生ける仲達を走らす（18音節）
 - ・ 寧ろ鶏口と為るも牛後と為る無かれ（20音節）
- 右の例と比べても「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」はかなりの長さがあり、一息に言い切ることが難しい。一般にコミュニケーションを取る場合には、他者との共通理解事項が前提となっている。特に、当該成語における漢文訓読調の「安んぞく知らんや」の文体は日常生活の中で独特の響きをもって相手に伝わるはずである。発信者は「コード（文法規則）」を記号化してメッセージを作成し、受信者はこれを様々な状況下において「コンテキスト（文脈）」に

当てはめながら読み取ることになる。

* ロラン・バルトは、『零度のエクリチュール』（石川美子訳）において「言語（ラング）」、「文体（ステイル）」、「文学（社会）言語（エクリチュール）」を種別している。「言語」は「日本語」のような言語体系、「文体」は個人の語感・書き癖であるのに対して、「エクリチュール」は歴史や社会に影響を受ける限定的な言葉遣いを指す。「言語」と「文体」は対象であるが、「エクリチュール」は機能であり、歴史との連帯行為である。これに照らせば、文語体を用いた「引用型成語」も「エクリチュール」の一つに数えることもできる。前節までの用例からは基本的に会話文として表出された「パロール（発話行為）」の中に多く引かれたが、この反語形「いづくんぞ（なんぞ）〜ん（や）」の文体は援用者によって意識的に用いられた状況が窺える。つまり、当該成語が文化遺産のごとく「パロール」に取り込まれて人口に膾炙したのも、聞き手が漢文脈の文語体による硬質的な響きに魅力を感じたためであると思われる。

さらに、先掲の用例からは「いづくんぞ」と「なんぞ」双方が使われていたことがわかる。江戸時代の儒者伊藤東涯『操觚字訣』には「安ライツクンゾ、ナンゾトヨム」、禅僧釈大典の『詩語解』には「安何也。二字音通義通。比レ何語寛」とあり、「安」は「なんぞ」とも読み習わしていた。これに伴い、当該成語における

「安知」にはかつては「いづくんぞ（なんぞ）知らん（どうして知っていか、いや知らない）」と読む反語形表現が定型の熟語として存在した。その漢詩用例には「安知万里連雲色」（『詩語解』）、「安知千里外 兼風」（『詩家推敲』）などがある。

昭和十一年（一九三六）に発表された太宰治『もの思ふ葦』には以下の記載がある。

いづくんぞ知らん。芥川はこの「つまり」を掴みたくて血まなこになつて追ひかけ追ひかけ、はては、看護婦、子守娘にさへ易々とできる毒薬自殺をしてみました。

このほかにも「焉んぞ知らん、敗けたと思うた人が最後の勝利者たることを」（新渡戸稲造『自警録』）、「いづくんぞ知らんその懐中に、磨ぎ澄ましたところの釘手裏剣が、数十本蔵してあらうとは」（国枝史郎『名人地獄』）など、漢文訓読を基調とした文語表現が近現代文学作品まで脈々と受け継がれたことがわかる。

※バルトの用語は、内田樹『街場の文体論』も参照した。

五 まとめとして

本稿では引用型成語「燕雀安知鴻鵠之志哉」について時代背景及び諸書の用例を確認した。現在では当該成語は一般的に「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」が常套句として使用されている。しかし、和漢の文献においては、典拠における陳勝の言葉が一定の句形を保っていたわけ

ではなく、その引用には若干の異同が見られた。ただし、諸書の会話文においては頻繁に用いられ、「いづくんぞ（なんぞ）〜んや」とその口調に近づけようとした形跡も見受けられる。文体意識が顕著になった近代以降はその定型化が促進された。また、「パロール」の中に「エクリチュール」が取り込まれた用例として見ることも可能である。現在、「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」を会話文で使用する生徒を見かけることはほとんどないが、当該成語は大志を表明する若者の言葉であり、文語体のコードを身につけるうえでも最適な教材となる。

藤原定家は和歌の作成について「詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め」（『近代秀歌』）と述べたが、故事成語もまたコード化した定型句を様々な場面で引いている点では同様である。日常生活の中で「引用型成語」使用の際には常に言葉の響きが体感されるが、かつては書記言語でもあつた格調高い文語体のリズムは学習者の言語感覚の涵養につながるはずである。古典教材を現代語訳ではなく、あえて原文で取り扱う意義はこうしたところにあるものと思われる。本年度から高等学校において新科目「言語文化」が実施され、改めて「言葉がもつ価値」に重点が置かれるようになった。こうした流れの中で当該成語を含む「引用型成語」が有する文体意識がさらに求められることになるだろう。